船津輸助蔵梁啓超の資料について

李　海

一　はじめに

拙論「梁啓超と船津輸助――『和文漢読法』の評価をめぐって」（Autures　第三号、二〇一〇年三月）脱稿後まもなく幸運にも、船津輸助の孫娘の夫君伊澤隆男氏からご連絡をいただいた。伊澤氏は筆者に船津の末子で中国詩話研究の第一人者船津富彦氏がご健在であることを教えてくださった。二〇一〇年六月、学会発表のため東京へ行く機会を利用して、筆者は当時九五歳になられる船津富彦先生のご自宅を訪ね、船津輸助蔵『和文漢読法』を頂いた(1)。

同年十月、筆者は埼玉県鳩ケ谷市にある船津本家に取材し、船津家を継いだ船津愉一郎氏から貴重な資料を頂いた。本論では、梁啓超と船津輸助に関するこれらの資料の紹介と分析をする。

資料の公開に先立ち、梁啓超と船津輸助との関係について述べておく。

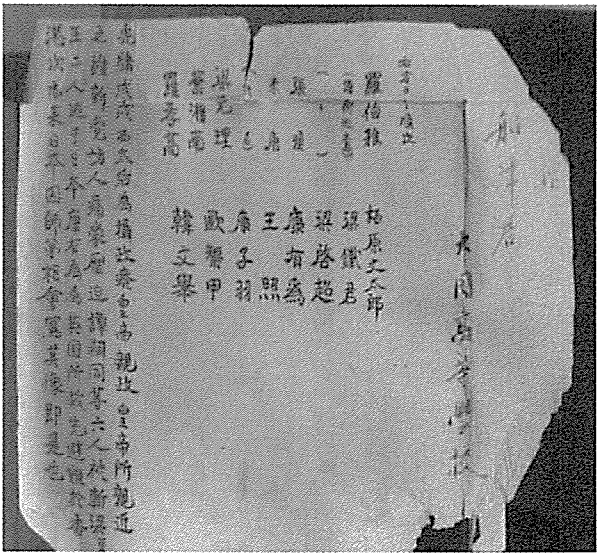
小川博氏は「明治三十四年四月二十八日に東京商業学校（旧大同高等学校）という中国人留学生教育機関が開設した。［中略］成田山史料館に所蔵される柏原文太郎文書の中に校長犬養毅、監督兼教習柏原文太郎、教頭梁啓超、支那学支那文学教習麦孟華、政治財政法学博士教習松崎蔵之助、英語歴史教習重田友介、経済法学博士天野為之、哲学歴史文学士教習川田鉄也、教育文学士教習真岡湛海、言語学文学士教習藤岡勝治、数理理学士教習広瀬芳唏、日本語教習金井保三、歴史英語米国文学士教習神谷卓男、政治経済法学士上野貞正、教習範、教習麦仲華、日本語日本文教習船津輸助」(2)と書い

ている。梁啓超は華僑の子弟教育を目的とした学校の教頭である、船津はその学校に招かれた日本語及び日本文教師であり、この時期に梁啓超が船津に贈った品々は船津家で丁重に保管されていた。これら貴重な資料を筆者が拝見できたのはこのためである。

二　資料解説

図一

日本の明治維新を手本にした康有為、梁啓超らの戊戌変法は一八九八年八月六日に西太后ら保守派の弾圧によって、失敗に終わった。光緒皇帝は瀛台に幽閉され、八月十三日には譚嗣同らいわゆる戊戌六君子が処刑された。梁啓超は八月六日に日本公使館に避難し、日本の軍艦大島号で日本に亡命し、



図二

十月二〇日に東京に到着した(3)。康有為は八月五日に北京を逃れ、九日に上海に到着、十四日にイギリスの軍艦に護送されて香港に至り、九月五日、日本に渡った。図一は柏原文太郎の借家にて撮影された、異国での再会を果たした康有為と梁啓超を捉えた貴重な写真である。この写真は柏原文太郎が船津輸助に大同高等学校の日本語教師として招聘のため明治三十三年四月九日に送った書簡に同封されていた。

図二は写真中の人物の配置表であり、左辺に「光緒戊戌西太后為攝政廃皇帝親政皇帝所親近之維新党諸人痛蒙壓迫譚嗣同等六人被斬梁（啓超）王二人逃于日本康有為為英国所救先避難於香港次亦来日本因師弟相會寫其像即是也」と記されている。

柏原文太郎は号東畝、千葉県成田の人。明治二六年東京専門学校英語政治科を卒業し、学術優等を以て大隈賞を受賞した。当該校が明治三五年早稲田大学に名称変更すると柏原は評議員になった。明治三一年十一月二日、東亜同文会が設立されると、幹事に就任した。日本に亡命してきた梁啓超らの世話にあたっていた(4)。梁の門人楊維新は丁文江宛書簡で、柏原文太郎について「この人は任公先生と親密であり、このころ兄弟の契りを結んでいた」(5)と記している。梁啓超は一八九九年十一月一七日、柏原文太郎の名前と旅券を借りて、ホノルルを経由で、サンフランシスコへ、保皇派宣伝、募金活動の旅に出た。出発の五日前、「柏原東畝が箱根の環翠楼で送別の宴を開いてくれ、席上絹紙を出して揮毫を求めたので「壮哉此別」（壮なる哉　此の別れ）の四字を書き、さらに小詩一首を添えた」のである。小詩とは『壮別二十六首』の第一首である(6)。

丈夫有壮別、　丈夫　壮別有り
不作児女顔。　児女の顔を作さず
風塵孤剣在、　風塵　孤剣在り、
湖海一身単　　湖海　一身　単なり
天下正多事、　天下　正に事多し、
年華殊未闌　　年華　殊に未だ闌きず
高楼一揮手、　高楼　一たび手を揮えば、
来去我何難　　来去　我何ぞ難からん

また、第十四首には

我昔靈山會、　我　昔　靈山に會し、
與君為兄弟　　君と兄弟と為れり。
千刧不相遇、　千刧　相ひ遇せざるも、
一見若為情　　一見して　情を為すが如し。
許國同憂樂、　許國　憂樂を同じうし
論交託死生　　論交　死生を託す。
如何別容易、　如何ぞ別るることの容易なる、
無語只惺惺　　語無くして只だ惺惺たり。

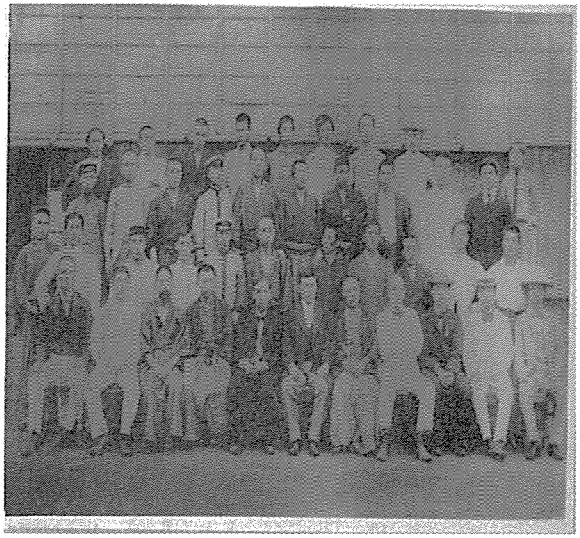
この詩には「別柏原東畝一首、余与東畝為兄弟之交。」と注が付されている。梁啓超はハワイ滞在時、柏原に近況報告をしている。そのときの書簡には、二人の友情を語ったこの第十四首が同封された(7)。

図一の写真には、康有為、梁啓超、柏原文太郎のほか、中国近代史に名を残した人物も居るので、少し触れておきたい。

韓文挙、葉湘南は、梁啓超が時務学堂の総教習を務める時、分教習に薦めた人物である。

王照は戊戌変法失敗後、梁啓超と共に日本に亡命した。一九〇〇年、彼は日本の仮名を参考に漢字の偏と旁から作成した「官話合成字母」という北京語表記用の文字を発表し、清末の文字改革家として知られている。梁鉄君は康有為の友人で、西太后暗殺活動に従事したが、一九〇六年七月一三日に袁世凱によって毒殺された人物である。

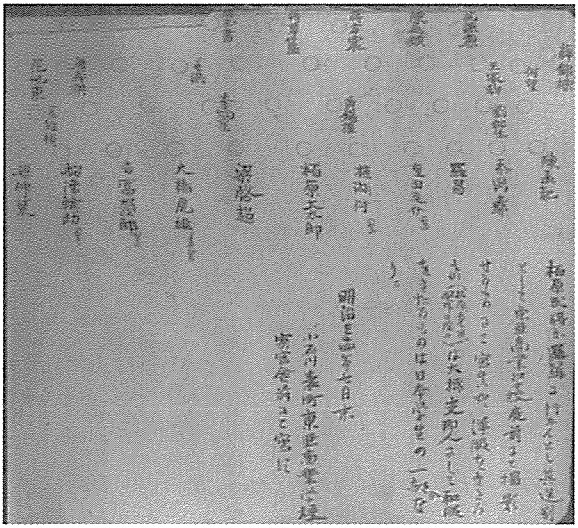
羅孝高（名は普）は康有為の弟子で、同門の梁啓超より一年早く来日し、東京専門学校で学んでいた。梁啓超と合同で日本語速成書『和文漢読法』を編纂したことで知られている(8)。彼はまた、ヴェルヌの Deux Ans de Vacances（梁啓超の訳名『十五小豪傑』、森田思軒の訳名『十五少年』）の後半九回の訳者でもある。他にも数多くの西洋文学作品を日本語訳から重訳するなど、多くの業績を残した(9)。



図三

図三は、明治三四年七月の末、柏原文太郎は暹羅（今のタイ）旅行前、東亜商業学校庭前で撮られた記念写真である。図四は写真裏里に記載された人物配置表である。

大橋虎雄はこの時日本新聞記者で、後に京都大学で中国文学を講じた鈴木虎雄のことである。一時大橋と名乗ったのは、徴兵を遁れるためであったという[10]。ちなみに、京都大学文学部図書室収蔵『和文漢読法』には「鈴木抱軒」の蔵書印があり、鈴木虎雄の蔵書という[11]。彼は梁啓超と交流があり、その縁で『和文漢読法』を収蔵したと筆者は考えている。



図四

重田友介は梁啓超が大同学校を開設する前に、梁の信奉者

および学生たちに日本語を教えていた[12]。重田は柏原文太郎の同期生で、成田山史料館が所蔵している明治三七年四月の東亜商業学校の学則では、講師として、英語、歴史の授業を担当していた。

重田は漢詩も能くし、梁啓超の『清議報』第五〇冊（光緒二六年六月十一日）の詩文辞随録欄に「環翠楼晩望」を、ついで第五一号（光緒二六年六月二一日）に「蘆湖泛舟」と題する漢詩を発表した。

桂湖村は越後で生まれ、柏原文太郎の同期生で、明治二五年に早大卒業と同時に、日本新聞社の客員社友として招かれる。日刊紙『日本』（明治二二年創刊、陸羯南主宰）短歌欄担当者は湖村であった（後任は正岡子規）[13]。桂湖村と梁啓超の交流は、主に詩文の贈答であったと考えられる。一八九九年春、梁啓超、康有為らは、羯南、湖村に招かれ、上野の鶯亭で詩文会を開いた。このとき梁啓超は「羯南湖村招飲上野鶯亭以詩為令強成一章」を作った[14]。『清議報』第十三冊（光緒二五年三月二一日）の詩文辞随録で梁は、桂湖村への献呈作「雷庵行　贈湖村小隠」を掲載した[15]。通常の贈答詩と異なり、梁啓超は故国を改革しようとする熱意をこれらの詩に盛り込んでいたのである。

この写真中にも、中国近代史上有名な人物が数多く写っており、彼らの多くは革命家になった。

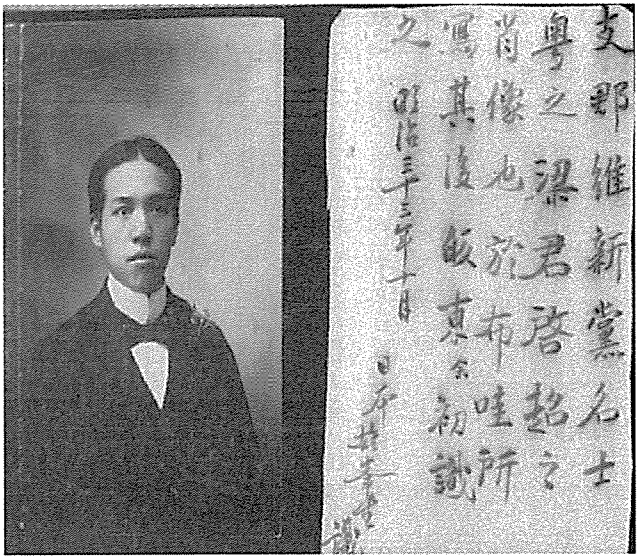
秦鼎彝（力山）（一八七七～一九〇六）は『国民報』の創刊者の一人で、『国民報』の発行人は船津輸助となっている[16]。当時、日本の新聞紙条例第六条の規定では「内国人ニシテ満二十歳以上ノ男子ニ非レハ発行人、印刷人トナルコトヲ得ス。公權ヲ剥奪セラレタル者及公權ヲ停止セラレタル者其停止間発行人、編輯人、印刷人トナル事ヲス」[17]と、外国人が日本で出版活動を行うには日本人の協力が不可欠であった。彼らのために船津が尽力していたことがわかる。

範源廉（一八七四～一九二七）は、字静生、号は静山、静川、湖南湘陰の人。湖南時務学堂に学び、のちに戊戌政変で日本に逃れた梁啓超を追慕し、蔡鍔とともに来日、以来長きにわたって梁啓超と近しい関係にあった。一九〇四年に帰国後、学部の主事、参事、清華学堂副監督などを歴任し、辛亥革命後は国民協進会や共和党、進歩党の結成に参与し、いわゆる研究系の幹部となった。教育行政にも明るく、一九一二年、唐紹儀内閣の教育部次長に任命され、同年七月、蔡元培

に代わり総長に昇格。梁啓超らとともに護国運動に参加した後、一九一六年には段祺瑞内閣の教育総長兼内務総長に就任した。その後訪米視察に赴き、帰国後は北京政府の教育総長や北京高等師範学校校長などを歴任した。船津宛の手紙は二通が残されている。写真に写った範旭東は範源廉の弟で、辛亥革命後、南京臨時政府の財務部に奉職、一九一四年には天津塘沽で久大塩業公司を創設するなど、民国実業界の大物であった。

蔣尊簋（一八八二～一九三一）は、字は百器、伯器、浙江省諸暨の人。蔣智由（蔣観雲）の息子。光緒三一年（一九〇五年）に日本の陸軍士官学校を卒業、翌年に光復会、中国同盟会に加入。帰国後、浙江や広西で軍事教育に携わり、宣統元年に広東で新軍の協統に任ぜられる。武昌蜂起後、広東軍務部長、宣統三年十一月二十八日に浙江都督となった。護国戦争の際には浙江で挙兵し、護法戦争では護法軍政府側にいた。一九二一年に広州国民政府軍政部次長、一九二六年に浙江省政府委員などを務めた。

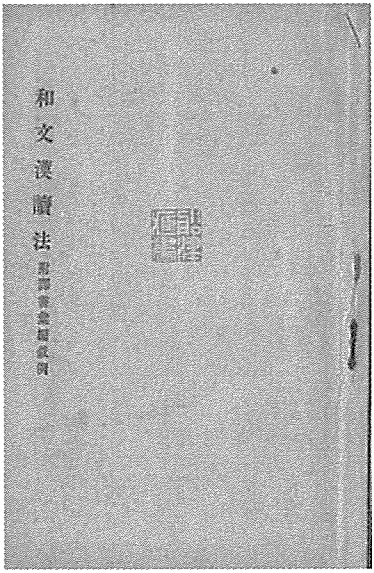
梁仲策（一八七六～一九六五）は梁啓超の弟である。本名啓勲、室号は曼殊室、広東省新会の人。十七歳の時、兄に従って康有為の弟子となり、一八九六年以後、梁仲策は上海で『時務報』編輯となった。その後さらにアメリカに留学、コロンビア大学で経済学を学んだ。民国初年に帰国した後、北京の南長街に住居（曼殊室）を構え、文筆業やいくつかの大学の教師をつとめた。社交、学術、家事（一族の世話）などさまざまな面で多忙な兄の補佐をつとめ、その生涯を通じてつねに良き理解者にして相談相手であった。兄ほど著名ではないが、中国詩歌の研究で知られ、『詞学』『稼軒詞疎証』『中国韻文概論』などの著書を残した[18]。



図五

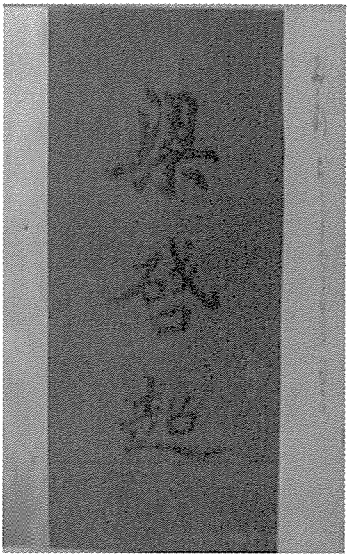
図五は梁啓超の有名な写真である。右側に「支那維新党名士粵之梁啓超之肖像也於布哇所写其後飯東余初識之　明治三十三年十月　日本雄峯生識」と書かれている。雄峰は船津の雅号である。

船津が記すようにこの写真は梁啓超が康有為の命令を受け、ハワイへ向い、保皇党の募金活動を行った期間中に撮影したものである。



図六

図六は梁啓超と羅普が共著した日本語学習本である。一九三五年に周作人が「和文漢読法」という随筆を書く際、中国ではすでに希観書になっていた。



図七

図七は右に小文字で「支那ノ名刺　大臣ニナリシ事アリ又有名ナル著述家　昭和四年没」と書かれている。これは赤い紙に書かれていて、名刺とは異なるのではないかと思われる。船津は中国人による初の日本語教科書『東語正規』の著者戢翼翬や麦孟華などの名刺を所蔵していた。それは、厚めの白い紙で、寸法は今日に使われている名刺とはほぼ同じである。名前のみ記された図七の紙片は新年の挨拶に使われたのではないかと筆者は推測している。船津は「文光」（孫文を指す）と書かれていた名刺も所蔵していた。当時の孫文、梁啓超はともに清朝政府に狙われていたため、名刺を配ることを控えたのではないかと思う[19]。

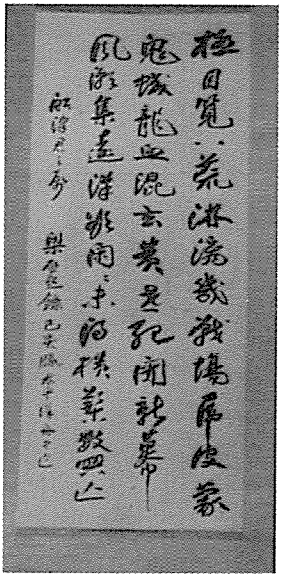
図八

図八は梁啓超が自作「澳亜帰舟雑興」四首の第二首を写して、船津に贈った扇子である[20]。

拍拍羣鴎相送迎、　拍拍たる羣鴎は相ひ送迎し、
珊瑚灣港夕陽明。　珊瑚灣港　夕暮　明るし。
遠波淡似裡湖水、　遠波は淡きこと　裡湖の水の似く、
列島繁於初夜星。　列島は　初夜の星より繁し。
蕩胸海風和露吸、　胸を蕩かす海風は　露を和して吸ひ、
洗心天樂帶濤聽。　心を洗ふ天樂は　濤を帶びて聽く。
此遊也算人間福、　此の遊　また算す　人間の福と、
敢道潮平意未平。　敢へて道ふ　潮は平けくも　意　未だ平かならずと。

一九〇一年三月下旬、オーストラリアを離れた梁啓超が、フィリピン経由で日本に戻る途上、船上における感興を詠んだ七言律詩である。首聯では、群鷗を擬人化し、拍拍という擬態語を用いてその躍動感を高めている。豪洲から帰還する私（梁啓超）を送り、そして、目的地日本へと導くとも読み取れる。率直に喜びを表現した場面である。詩人は自ら「澳洲沿南太平洋岸、珊瑚島最多、亦名珊瑚海」と注釈している。一九八一年に世界自然遺産に登録されたこの地の美しい夕暮れに、百年前の梁啓超も陶酔し、静謐、平和な姿を描き出している。遠くからの波も内陸の湖のように穏やかで(21)、列島は夕暮れの星のように輝く。船上の詩人は露混じりのさわやかな海風を胸いっぱいに吸い込み、波音と渾然一体となって天上の音楽に変じた海風に耳を傾け、心を清める。

このように、よい日のよき情景につつまれた今回の遊歴は、人間の幸福と言ってよかろう。しかし、静かな潮流を目の前にしても、詩人の心情は決して海波のような静謐にならなかった。その穏やかならざる心の淵源が、如何なるものかを明言せず、読者の想像に委ねるのは作詩における要諦である。政治改革の失敗で、日本に亡命を余儀なくされ、啓蒙運動に奔走する梁啓超の経歴を想起すれば、彼の内心が穏やかにならぬ理由は容易に推察されよう。内憂外患の情勢は詩人の心を安らかにしなかった。この美しい景色と憂国の心情と強烈なコントラストを為している。筆者が思うに、梁啓超は船津に自らの思いをより強く共感してほしいと願いをこの扇子に込めたではないか。



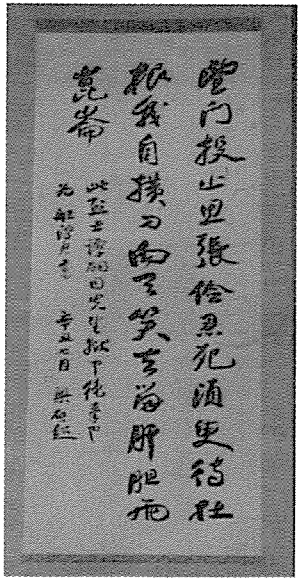
図九

図九は梁啓超が己亥太平洋舟中で作った『壯別二六首』の第二五首を筆写した掛け軸である[22]。

極目覽八荒、
淋漓幾戰場。
虎皮蒙鬼蜮、
龍血混玄黄。
世紀開新幕、
風潮集遠洋。
欲閑閑未得、
横槊數興亡。

極目して　八荒を覽れば、
淋漓たり　幾の戰場ぞ。
虎皮　鬼蜮に蒙り、
龍血　玄黄に混ず。
世紀　新しき幕を開けば、
風潮　遠洋に集ふ。
閑を欲すれども　閑未だ得ず、
槊横ざまにして興亡を數ふ。

詩人は視野を極限まで拡大して全世界を俯瞰し、血が滴り落ちる悲愴な戦場と、水と天が渾然となったいささか不気味な雰囲気を醸し出した。この詩は一見した限り、祖国の運命への言及は見出しがたいが、龍血は新と旧の戦い、正義と邪悪、変革と保守、進歩と遲延の戦いを意味しており、救国への情熱が感じられる[23]。この詩が詠われたのは、二十世紀という新紀元がはじまるわずか三日前である[24]。梁は「歴史の流れはこの太平洋に集まるであろう」と予想している。梁自身は「泰西人呼太平洋為遠洋。作者今日所居之舟、来日所在之洋、即二十世紀第一戦場也。」と注釈を施している。



図十

図十は辛丑七月、梁啓超は船津に贈った掛け軸である。掛け軸に筆写された詩も著名である。梁啓超は『飲冰室詩話』十八則（『新民叢報』第二六号、一九〇三年）も以下のように述べていた。

譚瀏陽獄絶筆詩、各報多登之。日本人至譜為楽歌、海宇伝誦、不待述矣。但其詩中所指之人、或未能知之。今録原文、略加案語。詩曰：「望門投止思張儉、忍死須臾待杜根。我自横刀向天笑、去留肝胆両崑崙。」

梁啓超は、改革のために命を捧げた志士の心情及び、日本での再起を図ろうとする自らの志を船津に共感してほしいと考え、この詩を掛け軸に筆写して託したのだろう。

三　結び

以上、筆者が入手した船津輸助蔵梁啓超資料について、その周辺問題も含めて考察した。図一～五の資料はすでに小川博氏が『燕京佳信』で言及していたが、本稿で再度論じたのは多くの梁啓超研究者がこの『燕京佳信』に注目すべきだと思われたからである。『燕京佳信』は船津が北京東文学社に勤めていた時、北京の見聞を綴った手紙であり、清末北京の風俗を理解するにもたいへん有用である。解説の「船津輸助のこと」に、船津と清末の中国人との交流関係を論じた箇所があるが、残念ながら中国近代史研究者にはあまり注目されていなかったようである。また船津輸助という人物自体は梁啓超研究者によく知られていないのも現状である(25)。研究者により資料活用を促すため、あえてこれらの資料を本論で再録した。また、図六～十は管見の限り、梁啓超に関する新資料である。それは文物としての価値はもちろんのこと、学術の価値も高いため、この場を借りて公開し、拙見を付け加えた。内外の諸賢の教示を乞う次第である。

付記　船津富彦先生はかつて京都大学で今鷹先生と同僚の関係であり、その後、今鷹先生は名古屋大学に赴任し、船津先生に名古屋大学にて集中講義の担当を依頼したことがあると聞いた。船津先生はこの件について懐しく語ってくれた。後日懇親会で今鷹先生にお会いし、船津先生のことを話すと、

同じく名古屋大学での集中講義の件を思い出され、「その時、ずいぶんお世話になった」と感慨深く述べられた。両先生の友情を記念し、小論を草し、今鷹先生の喜寿を祝う。梁啓超資料の調査・収集にあたっては、船津富彦先生、伊澤隆男先生、船津愉一郎氏の御協力を得た。また梁啓超詩の拙訳は碇豊長先生の添削を受けた。諸先生に深く感謝申し上げる次第である。

注

(1) 拙論「船津輸助蔵『和文漢読法』と梁啓超」『東洋文化』一〇七号、無窮会、二〇一一年十月参照。

(2) 船津喜助編『燕京佳信――船津輸助の北京通信』(私家版、一九七八年、二四〇頁)

(3) 梁啓超脱出の経過について、増田渉「梁啓超の日本亡命について」『東京支那学報』(十三号、一九六七年)参照。

(4) 柏原文太郎の経歴については「列伝　柏原文太郎」を参照した。『続対支回顧録』下巻、原書房、一九七三年、六四七～六七一頁。

(5) 丁文江、趙豊田編、島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』岩波書店、第一巻、二〇〇四年、二八九頁。

(6) 『飲冰室文集』四五、中華書局、一九八九年、五頁。

(7) 『続対支回顧録』下巻、六五六頁。汪松涛編注、梁鑒江審訂『梁啓超詩詞全注』(広東高等教育出版社、一九九八年、十九頁)では、首句は「我昔露山会」になっていて、注釈では「露山、応是日本地名」となっている。『飲冰室文集』(四五、六頁)でも同じ露山になっている。

(8) 羅普「任公記事」「己亥(一八九九年)の春、任公(梁啓超)は羅孝高、名は普、と箱根へ行って読書にいそしんだ。(中略)当時、任公は日本書を読もうとしたのだが、仮名文字を諳していないことに苦しみ、孝高がもともと深く中国語の語法に通じている上に、今では日本語もできることから、両者を一体化すれば速成法を得られると考え、そこで互いに検討を重ねて、若干の通例(全四二節)を定め、初めて日本語を習う者に、いきなり中国語の語法に従って返り読みをさせてみたところ、十中八九、それで通じたので、『和文漢読法』を著して出版した。完璧とは言えないものの、学習者がこの方法を習得すれば、ほぼ日本語を読めること

になり、その効果はなかなか大きかった。」島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』第一巻、岩波書店、二〇〇四年、二九三～二九四頁。

(9) 羅普の業績はもっと評価すべきだと筆者は考える。多くの研究者は梁啓超には関心を示すが、梁啓超の周辺にいる人物があまり重視せず、羅普についての論文もないのが実情である。山田敬三氏は「『佳人奇遇』の訳者は、『清議報』掲載分に関する限り、疑いもなく羅普である。」と、羅普は訳者であるとの見解を表明した。その可能性はあるが、確かな根拠はない。すなわち、羅普に関する資料は少ないため、それに関する研究は今のところ進展が見られない。山田敬三「漢訳『佳人奇遇』の周辺――中国政治小説研究札記」『神戸大学文学部紀要』九号、一九八一年、五五頁参照。

(10) 小川博「船津輸助の燕京佳信後聞」『郷土はどがや』七号、一九八一年、二四頁。

(11) 夏暁虹「梁啓超与『和文漢読法』」『閲読梁啓超』生活・読書・新知三聯書店、二〇〇六年、二八二頁。

(12) 小川博「柏原文太郎と中島裁之――中国留日学生史の一駒」『社会科学討究』一九八九年、五頁。

(13) 村山広吉『漢学者はいかに生きたか：近代日本と漢学』大修館書店、一九九九年、一三九頁。

(14) 『清議報』第十冊、一八九九年二月二一日、六三六頁。ちなみに、北京大学中文系文学専門化一九五五級近代詩選小組選注『近代詩選』(人民文学出版社、一九六三年)では「湖村、未詳」と書かれている。汪松涛編注、梁鑒江審訂『梁啓超詩詞全注』(十九頁)では、「羯南湖村、日本隠者、漢学家、籍里事跡不祥」と記し、羯南湖村を一人日本人と間違った。

(15) 『清議報』第十三冊、一八九九年三月二一日、八二八頁。

(16) 実藤恵秀『中国人日本留学史』増補版、くろしお社、一九七〇年、九一頁。

(17) 『新聞紙条例』(勅令第七十五号、明治二十年十二月廿八日)奥平康弘監修、高野義夫発行『言論統制文献資料集成』1、日本図書センター、一九九一年、三九頁。

(18) 羅検秋『新会梁氏：梁啓超家族的文化史』中国人民大学出版社、一九九九年、二一四～二四五頁。

(19) よく知られているのは、梁啓超は吉田晋という日本名

を使用していた。（『梁啓超年譜長編』第一巻、二九六頁。）孫中山は中山樵の日本名を使用していた。さらに、梁啓超は一八九九年十一月一七日にハワイを経由し、米州へ赴く途中、壮別に二十六首を書いた。その第二十首、詩末自註には「諸子相従、多逃家艱辛而来、今皆自隠其名。」と、彼の門人たちさえ、名を隠したことが分かる。（『飲冰室文集』四五、七頁）。

(20)『飲冰室文集』四五、十五頁。

(21) 方志欽、劉斯奮編注『梁啓超詩文選』（五四九頁）の該詩の注釈では、「裏湖：指珊瑚環礁中的潟湖。湖中水浅波平、只有一些缺口与大洋相通」となっている。

(22)『飲冰室文集』四五、七頁。

(23) 汪松涛編注、梁鑒江審訂『梁啓超詩詞全注』（三七頁）

(24) この句に自註が付されている。「此詩成於西歴一千八九十九年十二月二十七日、去二十世紀僅三日矣。」（『飲冰室文集』四五、七頁）。

(25) たとえば、陳立新『梁啓超とジャナーリズム』（芙蓉書房、二〇〇九年、一三七頁）『清議報』投稿者身元不詳のリストに、船津輪助の名前があげられていた。劉建雲『中国人の日本語学習史――清末の東文学堂』（学術出版会、二〇〇五年、二〇五頁）北京東文学社教員の入退社状況には、船津輪助の名が挙げられたが、退社後の状況や、入社前の身分、出身は空白だった。